

# 大本營が 震えた日

# 大本營が震えた日

吉村 昭



新潮社版



大本堂が震えた日

昭和四十三年十一月二十日 印刷  
昭和四十三年十一月二十五日 発行

四三〇円

著者 吉村 昭

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
電話東京(262)二二二(大代)  
振替東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

印刷・塚田印刷株式会社  
© 1968 Akira Yoshimura

製本・大口製本所  
Printed in Japan

大本宮が震えた日 目次

|               |     |
|---------------|-----|
| 上海号に乗っていたもの   | セ   |
| 開戦司令書は敵地に     | 三   |
| 杉坂少佐の生死       | 三七  |
| 墜落機の中の生存者     | 五〇  |
| 意外な友軍の行動      | 六   |
| 敵地をさまよう二人     | 八一  |
| 斬首された杉坂少佐     | 九   |
| イギリス司令部一電文の衝撃 | 一二〇 |
| 郵船「竜田丸」の非常航海  | 一二四 |
| 南方派遣作戦の前夜     | 一四四 |

|             |     |
|-------------|-----|
| 開戦前夜の隠密船団   | 一五九 |
| 宣戦布告前日の戦闘開始 | 一七四 |
| タイ進駐の賭け     | 一九〇 |
| ビーン首相の失踪    | 二〇六 |
| 失敗した辻参謀の謀略  | 二三三 |
| 北辺の隠密艦隊     | 二三八 |
| 真珠湾情報蒐集     | 二五五 |
| 「新高山登レ一二〇八」 | 二七一 |
| これは演習ではない   | 二八六 |
| あとがき        | 三〇〇 |

装  
幀  
  
楨  
  
誠  
  
五  
郎

# 大本堂が震えた日



## 上海号に乗っていたもの

### 一

昭和十六年十二月二日朝、南支那の広東飛行場を、六機の九八式直協機が爆音をあげてつぎつぎと離陸した。

機は、飛行場上空で編隊を組むとただちに東へ針路をとった。

一番機は、第三直協飛行隊長内藤美雄大尉が操縦桿をにぎり、後部座席には五味省吾中尉が搭乗していた。

内藤大尉は、前日の夜、広東におかれた南支方面の作戦指導をおこなっている第二十三軍司令部（軍司令官酒井隆中将）付航空参謀衣川悦司少佐の不意の訪問を受けた。

あわただしく部屋に入ってきた衣川少佐の顔には、血の色はなく、その眼は異様な光をたたえていた。

「重大な任務を遂行してもらいたい」

衣川少佐は、立ったまま口早に言った。

内藤は、顔のこわばるのを意識した。

衣川少佐の表情はひきつれているし、その声は、ふるえを帯びている。それは、なにか異常事

態が発生したことをはっきりとしめしていた。

内藤の頭に、一瞬或る予感がかすめすぎた。それは、重苦しいほど緊迫の度を加えてきている周囲の情勢と密接な関連のあるものだった。

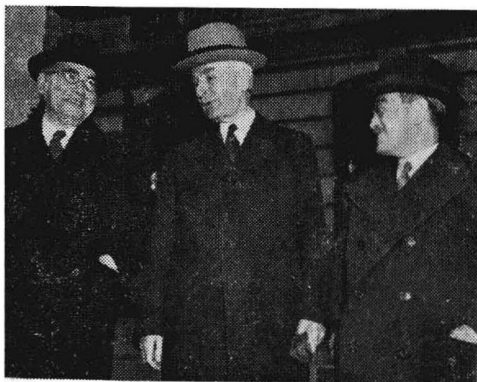
中国大陸に戦火が発生してからすでに四年余、頑強に日本軍に抵抗をつづける蔣介石の重慶政府を支援する米英両国は、ドイツ・イタリアと同盟を結ぶ日本に対して強力な圧迫を加えてきた。そして、昭和十六年にはいると、その圧力はさらに異様なまでに高められ、日本の在外資産凍結令の布告をはじめとして、石油等の重要物資の対日輸出禁止にまで発展していた。

戦争回避を目的に、野村駐米大使による日米交渉がはじめられたが、ルーズベルト大統領をはじめアメリカ政府高官との外交交渉は難航し、その打開のために十一月六日には来栖大使を特派して交渉をおしすすめた。しかし、その成果は悪化する一方で、遂に十一月二十六日、日米交渉の衝にあたっていたハル國務長官から、いわゆる「ハルノート」と称する苛酷な内容をもつ提案がたたきつけられた。

それは、「日本国政府は、支那及びインドシナより一切の陸、海、空軍兵力及び警察力を撤収すべし」という条件をふくむ新提案で、それは、八カ月に及ぶ日米交渉の経過を全く無視したものであった。

一将校にすぎない内藤にも、そのハルノートが日米交渉に完全に終止符をうつものであることははっきりとさとしていた。四年余にわたって中国と戦いをつづけてきた日本が、アメリカの強圧的な全兵力の撤収という提案をのむはずはないし、アメリカもそれを充分承知した上での提案とは思えなかった。

ハルノートは、つまりアメリカが対日戦争を決意したあらわれであり、日本もそれに応ずる覚



野村大使（左）とハル長官（中央）。  
日米交渉にのぞむ来栖特使（右）

悟をきめざるを得ないように思えた。

内藤は、対米英戦を避けることはおそらく不可能に近く、その開戦も、ただ時間の問題に過ぎないことに気づいていた。そして、それを裏づけるように、内藤の周囲にも、なにかあわただしい緊迫した気配がみられるようになっていた。

北支・中支からの兵力の移動が、目立たないような動きでひそかにおこなわれるようになり、その中には、遠く満州からの兵力もまじっているらしかった。

移動方向は南方で、事実内藤の指揮する第三直協飛行隊も、漢口の第四四戦隊から、南支軍の第二十三軍に協力せよという指令を受けて配属されていたのだ。

いよいよアメリカ、イギリス、オランダに対する戦争が開始されることに決めたのか、とかれば、衣川少佐の青ざめた顔を見つめながら思った。

「重大な任務」……とは、開戦を伝え、それに関する戦闘任務を命令するためのものにちがいないと思った。

しかし、かれの予想は、完全にはずれた。衣川少佐の口からもれた言葉は、意外にも全く戦闘とは関係のない内容だった。

「今夕四時、広東飛行場到着予定の中華航空の旅客機が、今もって到着しない。汕頭上空通過……という発信を最後に、通信もとだえた。現在まで待つてみたが、依然と

して消息がわからないところをみると、不時着は決定的と言っていい。明朝、ただちに全機をもって、搜索にあたってくれ。不時着地点は、汕頭、広東間の線上にあると思われる」

衣川は、そこで息をのむように言葉をきり、それから、急に眼をいからせると、

「これを単なる不時着機の搜索だと思ふな。総軍（支那派遣軍）総司令部からの厳命によるものだ。必ずさがし出すのだ。草の根を分けても探すのだ。いいか」

内藤は、衣川少佐の語気のはげしさに呆気にとられた。

中華航空といえ、上海を起点に南京、台北、広東へと定期航路をもつ民間航空会社で、使用されている機も一般乗客をのせる旅客機にすぎない。むろん軍関係者が優先的に乗る傾向は強いが、総軍命令で、しかも「草の根を分けても……」という表現は、余りにも大袈裟すぎる。

衣川少佐は、内藤のいぶかしげな気配を察したのか、急に声をひそめると、

「これは、絶対に他言してはならないが……」

と言って、内藤の顔を射るような眼で見つめた。

「実は、その機には、きわめて重要なものがのせられている。軍の機密に属する書類だ。それを、総軍司令部の一将校が手にして乗っている。海中かまたは友軍の占領地内に不時着しておればまだ安心はできるが、敵地に墜落しているとなると事は重大だ。単なる民間機の不時着とちがうと言ふのは、そうした理由からだ」

内藤は、事故の内容の概要を知らされて、漸く納得することができた。

「はい、わかりました。全力をあげて不時着機の搜索にあたります」

内藤は、姿勢を正して答えた。

「機種は、DC3型、双発機だ。機名は、上海号。もう一度言う、草の根を分けてもさがすのだ。」

いいな」

衣川少佐は、強い語気で言った。

内藤は、衣川を外まで送った。

衣川は、ふり返ると、

「頼んだぞ」

と再び念を押して、乗用車の中に身を入れた。

草の根を分けても……か、内藤は、機上で衣川少佐のひきつれた蒼ざめた顔を思い起していた。動揺しきった衣川の態度から考えると、旅客機に搭乗している将校の携行している書類はかなり重要なものらしい。

それは、支那派遣軍から第二十三軍に対する中国大陸に於ける新作戦を指示した命令書なのか、それとも、ひそかに噂うわさされているタイへの進駐準備に関するものなのか。いずれにしても、周囲でひそかにおこなわれている兵力の移動と、なにか深い関連をもつものにちがいないと思った。とにかくおれは不時着機を探し出せばいいのだ……、かれは、地上に眼を落した。

視界は、余り芳しくない。

六機の直協機編隊は、低空でゆっくりと東へ進む。下方に鉄道線路と平行に川筋のまばゆい輝きがみえ、水上には小さな舟が数多く浮んでいる。

中華航空の旅客機は、上海を出発、中継地点の台北飛行場で燃料を補給してから、支那海を横切り、汕頭にたどりつく。そして海岸沿いに西進して、広東に向う。

不時着機は、その航路からはずれていることも予想されるが、搜索のためには、その予定航路

を逆行して進む方法をとることが妥当だった。

やがて平行していた鉄道線路と川筋がわかれると、前方にひしめき合うような山なみが迫ってきた。

内藤直協飛行隊長は、他の五機にそれぞれ分散して搜索にあたることを命令した。

編隊はたちまちぐずれ、機は、思ひ思いに山なみに向って進んでゆく。

衣川少佐のその後の指示によると、前日「上海号」通過予定時刻頃には、その山岳地帯はスコールとも思えるような豪雨にさらされ、機は、その山岳地帯に不時着している公算が大きいという。その悪天候の余波がまだ残っているのか、曇々（じようじよう）とつづく山岳地帯には濃い密雲が立ちこめ、風防ガラスには強い雨も当り出した。

こんな悪い気象状況では搜索どころではない。むしろ自分の機も遭難する危険さえある。

しかし、衣川少佐のきびしい命令を思うと、危険をおかしても探し出さねばならぬ責任が課せられているのを、あらためて反芻（はんすう）した。

直協機は、地上軍の戦闘に直接協力する目的で製作された陸軍機で、一応偵察機という部類にはいつてはいたが、爆弾も計一二五キロの重さまで搭載できるし、前部には固定式、後部には旋回式のそれぞれ七・七ミリ機銃も装備されている。島（はたけ）などの荒地でも離着陸はできるし、また地上の通信筒（つづみ）を吊り上げ、投下をおこなえるような低空をゆるい速度でとぶことも可能な応用性の豊かな低翼単葉機だった。

そうした性能をもつ直協機は、偵察能力もむろん充分そなえていて、山岳地帯の不時着機搜索に最も適したものにちがいがなかった。

内藤機は、密雲にとざされた山岳地帯に突っ込んだ。

山なみが次から次へとあらわれ、機は、低空で、右に左に山肌をかわしながら進んでゆく。そして、後部座席の五味中尉は、山肌や深い山ひだに眼を向けつづけていた。

五味は、内藤隊長から不時着機のもつ意味を教えられてはいなかった。戦闘に参加するのならばやむを得ないが、このような密雲の中を、危険をおかしてまで民間機を搜索することは、五味には必要なことに思えてならなかった。

眼の前すれすれに迫ってくる山肌は見えるが、視野は、濃い霧におおわれ、雲のきれ間さえ見えない。

その広東東方地区の山岳地帯は、密雲におおわれることの多い難所で、これまで航空機の遭難もしばしば発生している。

或る輸送機の操縦士は、その山岳地帯にさしかかって、「雲山相接ス」という表現で通信を送り台北に引き返したともいう。それほど悪条件のそなわっている地域での搜索は、たとえ低空飛行をおこなっても、よほど良好な天候の日でなければ、地上の目的物を発見することとは至難であったのだ。

その日、直協機隊は、各機とも山岳地帯を搜索後、海岸沿いに汕頭方面にまで飛びつづけたが、遂に不時着機は発見されず、機首を西方にもどさなければならなかった。

「成果なし」の報は、広東飛行場にもどった



陸軍の地上戦援護に威力を発揮していた九八式直協機。

内藤直協飛行隊長から、ただちに第二十三軍司令部の衣川少佐に報告された。

内藤は、搜索経過を詳細に報告するとともに、遭難の可能性の濃い山岳地帯の気象状況がきわめて悪く、搜索もほとんど不可能であったことを口にした。が、

「そんなことは、わかっとる。なにがなんでも探し出すのだ。翌朝早く搜索にあたれ。いいか、草の根を分けてもさがすのだ。いいな、草の根を分けてもだぞ」

という怒声に近い声が、返ってきただけだった。

内藤は、呆然とした。

「隊長、なぜ衣川参謀殿は、こんな無茶な搜索をやらせるのですか」

隊員が、内藤をいぶかしそうに見つめた。

「詳細は知らん。しかし、これは重大任務なのだ。草の根を分けてもさがせ……と命令されておる。翌朝早く出発だ」

内藤は、けわしい表情で隊員に命じた。

しかし、かれにしても、衣川少佐が、なぜそれ程興奮しているのか察することはできなかった。

## 二

第二十三軍司令部の不時着機搜索の命令は、直協飛行隊のみに発せられたものではなかった。

上空からの搜索は、広東の独立飛行第十八中隊にも指令され、さらにそれは、汕頭・広東間約四〇〇キロにわたる航路に沿った地域の、地上各部隊へも連絡されていた。